

氏名	Letizia GUARINI (准教授)
こんな研究をしています	日本現代文学における家族、とりわけ父親像や父娘関係を研究しています。また、文学における妊娠・出産・育児、女同士の友愛関係、フェミニズム運動と文学の関係など、さまざまなテーマに焦点を当てながらジェンダーの視点から文学を研究しています。国や言語の境界を越えるトランスリンガル・トランスカルチュラルな文学についても研究しています。
こんな成果を挙げています	「異国の共同体で居場所を見つける—須賀敦子の越境性をめぐって—」『昭和文学研究』90号、2025年3月、82-97頁 “Trans Bodies and Gender Fluid Fatherhood in Contemporary Japanese Literature.” <i>Gender Fluidity in Japanese Arts and Culture. Critical Essays</i> , edited by Dean Conrad and Sayuki Hirano. McFarland, 2025. “‘Breast-Is-Best’ and Care in Fukazawa Ushio’s <i>Chibusa no kuni de</i> .” <i>Japanese Language and Literature</i> 58(2) (2024): 253–283. https://doi.org/10.5195/jll.2024.323 “Dismantling the Family Ideology in Contemporary Japanese Literature: Hatred and Disgust in Three Family Stories by Kakuta Mitsuyo.” In <i>The Asian Family in Literature and Film: Changing Perceptions in a New Age-East Asia, Volume I</i> , edited by Bernard Wilson, Sharifah Aishah Osman. Palgrave Macmillan, 2024. 『アンソシヤル ディスタンス』—コロナ文学が語る脆弱性とケアの倫理— 泉谷瞬編『現代女性作家読本 22 金原ひとみ』鼎書房、2024年
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	文学はもちろん、映画、漫画、アニメ、ドラマ、CMなど、幅広くメディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象を分析することに関心があります。また、日本、そして世界各国における家族の形の多様化や性役割に関する社会的規範への違和感を語る声にも興味を持って研究しています。
こんな授業を行なっています	「多文化相関論IA・B」 ジェンダー研究理論を学びながら、人種、ジェンダー、性的指向・性自認などについて考察し、現代社会と文化について考える授業を行います。また、ポップカルチャーとクィアネスの関係性について考察しながら、クィア理論の観点から表象文化を分析する力を養います。
学会や社会でこんな活動をしています	ジェンダー・セクシュアリティ研究についてのイベントを企画・運営しています。今までジェンダーと写真に関するイベント、翻訳に関するイベント、また映画上映会などを開催してきました。 また、イタリア語で日本の文芸作品を紹介して、翻訳しています (Seo Maiko, <i>Cinque benedizioni per un matrimonio</i> , Edizioni E/O, 2026; Miura Shion, <i>Il pesce e la luna</i> , Asiasphere, 2025;その他)。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	フェミニズム、クィア理論、ポストコロニアル理論を交差させ、制度的差別や感情などを研究するフェミニスト学者のサラ・アーメド (Sara Ahmed)。 国際文化研究科の修了生でもある、「台湾生まれ、日本語育ち」の作家、温又柔。